

過
ち
の
プ
ラ
イ
オ
リ
テ
ィ

櫻
井
知
愛

人物

榎木結愛	(2 9)	WEBデザイナー
赤城敬寛	(3 3)	会社員
浦本綾花	(2 9)	結愛の友人
榎木聡美	(5 6)	結愛の母
看護師 A		
看護師 B		

○病院・病室内（夕）

ベッドの上で眠っている榎木聡美（56）。

ベッドサイドで聡美の手を握っている

榎木結愛（29）。

結愛「お母さん……5年もかかっちゃったけど、やっと見つけたよ……あの男を」

結愛、聡美の手を自分の額に当てる。

結愛「違う、やっと気がついた、だ……。一

番近くにいたのに……ずっと気づけなかつ

たなんて……」

やつれた顔で眠ったままの聡美。

結愛「ごめんね……」

聡美の横に顔を伏せる結愛。

○同・ナースステーション内（夕）

ナースステーションの中には数人の看

護師。その前を通りがかる結愛。

看護師Aが応対していた電話を置き

看護師A「救急から応援要請です！観光バス

が絡む多重事故で負傷者多数、今現場で救

急隊がトリアージ中で……」

結愛、血相を変えてナースステーションに飛び込む。

結愛「ダメっ！トリアージなんてやったらダメ！早く止めて！」

看護師 A「榎木さん？」

結愛の呼吸が荒くなる。

結愛「トリアージは殺人行為！……命に、優

先順位を……つけるなんて……」

結愛、過呼吸になり、膝をつく。

看護師 B「PTSD の発作です。榎木さん、落ち着いて、ゆっくり息を吸って」

看護師 B が結愛の背中をさする。

結愛、朦朧としながら鞆を漁る。男性物のニットの手袋を片方だけ取り出す。

結愛「だめ……許さない……復讐を……」

何度も何度も息を吸う結愛。

結愛「……敬寛……」

胸の前で手袋を強く握りしめる結愛。

○赤城のマンション・寝室内（夜）

ベッドの上で裸の体を寄り添わせて眠る赤城敬寛（33）と浦本綾花（29）。
瞼を開く赤城。静かに起き上がる。

○同・リビング内（夜）

間接照明が灯り、チェストの前に赤城の影が伸びる。

チェストの引き出しからリングケースを取り出す赤城。

ケースを開くと、小さなダイヤが輝く指輪。

赤城の目から涙が落ちる。

綾花の声「敬寛さん？」

赤城、リングケースをチェストに戻す。
ブランケットを肩から掛けて、ソファの横に立っている綾花。
ソファテーブルに二つのワイングラス。
その下にワインボトルが三本転がっている。

赤城「綾花ちゃん……その……ごめん……」

綾花に背を向ける赤城。

綾花、赤城に近づき背中を抱きしめる。

綾花「気にしないで。ゆっくりで大丈夫」

赤城「い、いやそうじゃなくて。やっぱり……」

……こんな事、誰のためにもならないよ」

綾花、赤城の腰に回した手に力が入る。

綾花「私、敬寛さんと結愛が会おうずっと前から、敬寛さんの事好きだった」

赤城「え、え？　どういうこと？」

綾花「十年前、急性アル中で運ばれたの。その時助けてくれた救急隊員が、敬寛さんだった」

赤城「ごめん……俺、全然……」

綾花「だから私なら、本来の、ありのままの敬寛さんを愛せるよ」

赤城「……ごめん」

綾花「結愛がいるから？」

綾花から視線を逸らす赤城。

綾花「敬寛さんの結愛への気持ちって、本当

に愛なのかな？」

赤城「どういう意味？」

綾花「ずっと償いのつもりで尽くしてたんじゃないの？」

赤城、咄嗟に綾花の手を振り解く。

赤城「違う。そんなんじゃない。出会った時は、あの事故の時の子だって知らなかった」

綾花の肩のブラケットがはだける。

赤城「それでも、俺には結愛しかないって。

俺が一生守ってやりたいって思ったんだ」

綾花「でも、その結愛が望んでることだよ」

赤城「え……？」

綾花「敬寛さんのこと、早く忘れたいって」

赤城「……結愛、が……？」

綾花「だからまずは、敬寛さんが一歩前へ進まなきゃ。結愛も前へ進めない」

綾花、赤城の耳元に顔を近づけて

綾花「結愛のために、悪い男になって」

唇を噛み締める赤城。

乱暴に綾花をソファへ押し倒す。

○ 結愛と綾花のマンション・外観（深夜）

オートロックがついた低層マンション。

○ 同・リビング内（深夜）

リビングの一角にパソコンデスク。

呆然とパソコンに向かう結愛。

テレビに映るニュース番組。

横転した観光バスにトラックと乗用車
が複数台衝突している。

結愛がテレビを消す。

大きな深呼吸をする結愛。

綾花の声「ただいまあ……」

リビングに入って来る綾花。

綾花「結愛、まだ起きてたんだ」

結愛「ちよっと仕事溜まって」

綾花「どうした？顔色悪いよ？」

結愛「……また発作出ちゃって」

綾花「最近多いね……無理しすぎじゃない？」

結愛「無理するぐらいじゃなきゃ。頭の中が

暴走しちゃって……」

自分の額に手を当てる結愛。

綾花「あの男を見つけたら、そいつの幸せ全部ぶっ壊してやるって。あの威勢はどこへ行った？」

結愛「だって……恨んでた相手がまさか敬寛だったなんて……」

綾花「じゃあ敬寛さんを許してあげる？」

結愛「それは無理」

綾花「だよね。もし明日お母さんが目を覚まして、そんな結愛を見たらって考えたら、とてもいたたまれないもん」

綾花が結愛の背中に手を当てて

綾花「お母さんの事を思ったら、優先するべき気持ちは何か、すぐわかるよね」

結愛「それは……」

結愛、綾花の匂いに気がついて

結愛「綾花、今日どこ行ってたの？」

綾花「……敬寛さんのマンション」

結愛「な、何で？何で敬寛の？何しに？」

綾花「敬寛さんってさ、心が澄んでるよね。」

ガラスみたいに。綺麗で良いわけないでしょ？だから汚してあげようと思って」

結愛「な……何をしたの？」

綾花「言わせないでよ。結愛の復讐、手伝いたいだけ」

開きかけた唇を、ぎゅっと結ぶ結愛。

○映画館・前（早朝）

商業施設の一階に入口を構える映画館。

出入り口にシャッターが降りている。

人気は無い。

呆然と映画館を見上げている結愛。

結愛の背後に赤城が現れる。

赤城「……結愛？」

素早く振り返る結愛。

結愛「敬寛……何で」

赤城「結愛の方こそ、何してるのこんな所で」

映画館の方に向き直る結愛。

結愛「映画でも見ようと思って」

赤城「さすがに少し早すぎるよ」

結愛「……」

足早に立ち去る結愛。

赤城「結愛っ」

結愛、足を止める。

赤城「その……本当に、ごめん」

結愛「ごめんって……私を騙してた事？」

赤城「違う！騙してたんじゃない。ちゃんと

話そうってずっと思ってたんだ……」

結愛「じゃあ、トリアージの判断誤ってお母

さんを植物人間にしたこと？」

赤城「だからそれは……俺は上司の指示で」

結愛「それとも、綾花を抱いたこと？」

赤城「……え？」

結愛、咄嗟に額に手を当て、苦悶の表

情で膝が崩れる。

赤城「結愛！」

結愛に駆け寄り肩を支える赤城。

赤城を突き放す結愛。

呼吸を乱しながら、ニットの手袋を取

り出す。

胸の前で手袋を握り、深呼吸する。

赤城「それ……俺の……」

結愛、はっとして顔を伏せる。

赤城「この場所だって、俺たちが出会った場所だよ」

結愛「……」

赤城が結愛を抱きしめる。

結愛、瞼を閉じると涙がこぼれる。

赤城「俺には結愛しかない」

結愛「……私を愛してる？」

赤城、さらに強く結愛を抱きしめる。

赤城「愛してる」

結愛「そう……よかった」

結愛、赤城の頬に手を添える。

結愛「そのまま、そのまま私を愛していて」

赤城「……結愛？」

結愛「そのままずっと……私を愛しながら、私の顔を思い浮かべながら、そうやって綾花を抱いたらいい」

赤城「そんな事出来ない。俺には出来ない！」

結愛「嘘……」

頭を横に振る赤城。

赤城「……出来なかったんだ。それだけ俺は

結愛のことを……」

結愛、手袋を赤城の胸に押し当てる。

結愛「私は、一生あなたのものにはならない」

手袋から手を離す結愛。

結愛「それが私の復讐だから」

赤城を残し、その場を去って行く結愛。

櫻井知愛